2018.1.23

博物館 Dictionary No.204

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館2F-1「絵画（絵巻）」の「肖像図巻」に展示されている作品について勉強してみよう。

世界に一つだけの顔

皆さんは家族や友達の顔や体を、じっくり観察してみたことはありますか？大きな目の人、鼻の丸い人、太った人など、それぞれに個性があって、似た人はいても同じ見た目の人は一人としていませんね。しかもそれは知り合いの間だけでなく、世界中にも、そして人類の歴史上にも、おそらく見た目のまったく同じ人はいないのです。考えてみると不思議なことですね。

写真のない時代、人物の顔や姿は、それを写した絵や彫刻の「肖像」として記録され、後の時代に伝えられました。肖像の制作は古代から世界中で行われてきましたが、時代や地域によって、顔のどこに注目するか、どんな表情やポーズにするかなど、表現の方法は様々に異なりました。そもそも、すべての肖像が後の時代の人々に伝えるためだけに作られたとは限りません。たとえば古代エジプトには、死者の肖像画をそのミイラとともに埋葬する風習があったようです。

日本では平安時代の中期まで、歴史上の偉いお坊さんや伝説の聖人などを描くことはあっても、同時代に生きる貴族の肖像はほとんど制作されなかったと言われています。しかし、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて、一転して同時代の人々の肖像がたくさん作られるようになります。その中で「似絵」という言葉が生まれました。似絵とは、周囲の人物の特徴をとらえて描き分ける肖像画のことで、多くが細い線を重ねてスケッチするように表しています。今だと似顔絵に近い感覚でしょうか。似絵の文化は貴族の間に定着して、彼らの財産であった牛馬や、天皇・上皇の御姿までを写し取りました。

その似絵の代表作が「公家列影図」（鎌倉時代、13世紀）（図1）です。「公家」とは貴族のこと。「影」は肖像のこと。つまり貴族の肖像を並べた図という意味です。巻物に描

図1　重要文化財「公家列影図」（部分）　鎌倉時代　13世紀　京都国立博物館蔵

かれた貴族たちは、なんと57人。皆さんのクラスの人数よりもきっと多いでしょう。もしクラス全員の似顔絵を描けと言われたら、一人一人の特徴をとらえるのは案外大変なのではないでしょうか。

ただし、この作品に描かれた人たちは、全員が同じ時代に生きたわけではありません。巻物の一番初めに描かれた藤原忠通は、西暦1097年から1164年まで生きました。最後は1218年から1294年まで生きた花山院定雅と推測されています。100年以上の差がありますが、それぞれの時代に描き足されたのではなく、最初から最後まで一度に描かれています。つまり、画家は必ずしも実物を目の前にして描いたわけではなく、すでに残されていた過去の肖像を写してこの作品を制作したと考えられます。ただ肖像を写すときには、後の時代の人々が思い描いた人物像に基づいて、表現がほんの少しだけ変化することがあります。

図2　藤原頼長（1120～1156）

（図2）の吊り目の人物は、個性的な性格で知られる藤原頼長。理想の政治を追求し勉学に励んだ一方、強引で厳しい性格が周囲との対立を生み、「悪左府」（左府は左大臣のこと）と呼ばれ恐れられました。吊り上がった目は、そうした頼長の怖そうなイメージを伝えているのかもしれません。

図3　平清盛（1118～1181）

（図3）は『平家物語』でもおなじみ、平清盛です。武家でありながら正三位という官位を得て公卿に列したため、この絵にも描かれています。顎が大きく、他の貴族とは違って、武家の棟梁らしく逞しい印象で表されていますね。

（図4）のいかにも繊細そうな人物は、鎌倉幕府第3代将軍の源実朝です。頼朝と北条政子の間に生まれ、12歳で将軍となりましたが、実権をもつことなく、和歌に心を傾けました。最期は28歳の若さで暗殺されてしまいます。こうした悲劇的な人生が、儚げな表情に反映されているのでしょうか。

図4　源実朝（1192～1219）

歴史を勉強するとき、ただ教科書を読むだけでは、そこに登場する人々がかつて本当に存在して、悩んだり喜んだりしたことに、なかなか実感がわかないものです。人物の肖像を丁寧に描いたこの作品は、遠い過去に生きた彼ら一人一人の顔だけでなく、人となりや人生さえも、現代の私たちに伝えてくれているのです。

企画室　井並林太郎

印刷・富士印刷社